守山 てんこもり

時間も国境も超えた“学び”を知る場所に

下之郷の宝物に地元の子らが集う 環塾

弥生時代の遺跡を保存する下之郷史跡公園で、地元の子どもたち（小学3年生以上）が、日本の古文と英語を同時に学ぶ、現代の寺子屋を取材しました。

下之郷遺跡は9条の環濠（村を囲む濠）が発見された弥生時代の環濠集落で、国史跡に指定されています。

それぞれの思いを語り合う寺子屋「環塾」のスタッフ、左から筈井 俊輔さん、小渕 文恵さん、中川 法夫さん、小渕 一美さん

3月の卒業生

4月の入塾初日

寺子屋構想と遺跡の出会い 地域の宝を学びの場所に

ことのはじめは6年前。定年退職して地域に戻ってきた元県立高校校長、中川 法夫さんの「地域の子どもたちのために寺子屋を作りたい」という思いと、小渕 一美さんの地元の子どもや地域の人たちに地域の宝物（下之郷遺跡）を知って欲しいという思いが重なり、下之郷遺跡の特徴である「環濠集落」と「人の環」をかけた寺子屋「環塾」が誕生しました。

環塾は、地元の大人が、日本文化の源流といえる古文と、小学校の授業に導入される事になった外国語（英語）を教える現代風の寺子屋です。

スタッフには、中川さんと小渕さんのほかに、教職を目指している小渕 文恵さんと、子どもと触れ合う時間を大切にしたいという筈井 俊輔さんの2人の大学院生がボランティアで先生をしています。

勉強を通した絆作りで未来と成長を支えて

中川さんが寺子屋にこだわるのは理由がありました。江戸時代の寺子屋には、「ボランティアに近い形で開かれ、先生は教養と生き方の師にもなる」という、現在の学校や塾にはない側面がありました。

同じ地元に住む大人が地元の子どもたちのために開く寺子屋は、勉強を通じて子どもの成長に寄り添う絆作りの場です。これからの成長の過程や生き方を考える時に、寺子屋での体験が糧になってくれれば、と考えているそうです。学生ボランティアの2人も経験と学びを得られる、と話していました。

寺子屋「環塾」初日は「ABC」と「いろは歌」

中川さんたち先生は①先生のお手本を復唱する。②授業の最後は一人ずつ先生の前で暗唱する。③子どもが暗唱できるまで繰り返し付き合う、という江戸時代の寺子屋らしさを取り入れた授業風景のまま、学校の授業でも役に立つ授業内容を研究しています。

4月22日、下之郷史跡公園で平成30年度第一回目の寺子屋「環塾」が開かれました。

寺子屋初日の授業は「アルファベット」と「いろは歌」でした。先生の前で暗唱し、合格のハンコを押してもらってひと安心の子どもたち。一年を掛けていろいろ学び、3月に卒業した子どもと同じように、来春には堂々と笑顔で「環塾」を卒業していくはずです。

先生の自己紹介

授業（復唱）

授業（復唱）

授業（暗唱）

授業（暗唱）

第1回目の寺子屋の様子